



岡本太郎が思索した芸術の特徴

岡本太郎（1911-1996）は、『今日の芸術』（光文社知恵の森文庫、1954、1999）で、芸術とは「毎日の食べものと同じように、人間の生命にとって欠くことのできない、絶対的な必要物、むしろ生きることそのもの」（op. cit., 16）と捉え、芸術は「すべての人のうちにある人間性に共感を呼び、それをふるいたたせるものだから強力」（p. 173）で、「生命の燃焼する場所」（p. 175）と述べている。

芸術の絶対条件は、「のびのびとした自由感」（p. 167）で、「芸術は爆発だ！」という言葉の「爆発」は、「音もなく、宇宙に向けて精神が、いのちがぱあっとひらく。無条件に、それが爆発だ」（『芸術は爆発だ！』小学館文庫、1999、p. 31）と言及している。

さらに、『岡本太郎 歓喜』（二玄社、1997）では、生きる瞬間に絶望があり、「絶望を彩ること、それが芸術だ」「その虚しさを抱きながら、私はまったく反対の世界をひらくのだ」（ibid.）と述べている。岡本にとって芸術の本質は神秘力・呪力にあり、芸術には人間の生きる喜びや情熱、意外性や驚き、対立的緊張があると捉え、生命を燃焼させて切り開く呪術の一種と考えている。（吉村耕治）

●ことわざの中の色－1

日本のことわざや故事金言の中に「色名」が含まれるものがある。それを取り出して見よう。色彩教材の一助になるかもしれない。

出典は福音館書店 1968 年発行の「ことわざ故事金言小事典」である。

青字がことわざあるいは故事金言。

青菜に塩 青菜に塩をかけるとしおれるように、ぐったりと力無く、うちしおれるさま。

青は藍より出でて藍よりも青し 中国で青は濃い色を指し、元の藍の葉の色よりも濃いことから弟子が先生より秀でる事を言う。

出藍の誉ともいう。

朱（アケ）を奪う紫 中国では朱は正色であり紫は間色である。悪人が善人をしのぐことを憎むの意である。

朝に紅顔ありて夕に白骨となる 紅顔は若者の顔。生死の予測ができない無常感。

黄疸病みには何物も黄色く見える 心のねじけた者は、どんなことでも曲解するという意味。

烏の頭白く馬角を生ず 白い烏や角を持つ馬のように、ありうべからぬことの例え。

客と白鷺は立ったが見事 他家を訪問した時は長座するなという教訓。（永田泰弘）

●色名に採用したい季語－5

● 兜虫色（かぶとむしいろ）・盛夏
カブトムシの体色の茶色を帯びた黒。（C90 M100 Y100 K30）



● 青蔦色（あおづたいろ）・盛夏
蔦の葉の深い緑色。面状に広がる均一な緑色。（C90 Y100 K30）



● 青芝色（あおしばいろ）・盛夏
公園やゴルフ場の芝生の面状の緑色。（C70 Y100 K10）



● 紫蘇の葉色（しそのはいろ）・盛夏
アカジソの暗い紫色の葉の色。（C50 M80 K50）



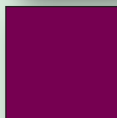
● 茄子色（なすいろ）・晩夏
食べ頃の茄子の実の艶のある紫色。（C70 M100 K50）



● 白桃色（はくとういろ）・晩夏
皮を剥いたみずみずしい白桃の果肉の色。（M3 Y3）



● 吾亦紅色（われもこういろ）・初秋
バラ科の多年草。暗紅紫色の楕円形の花穂の色。



（C20 M100 K50）

● 鬼灯色（ほうづきいろ）・初秋
色づいたほうずきの実の色。（M80 Y70）



（永田泰弘）